

第7回経済・テクノロジー委員会 議事録

1. 開催日時 2019年3月19日(火)13時00分～15時00分

2. 開催場所 虎ノ門ヒルズ森タワー9階 TOKYO会議室

3. 出席者(五十音順)

経済・テクノロジー委員

大田弘子委員長、秋池玲子委員、井伊基之委員、石黒一憲委員、榎田竜路委員、
翁百合委員、キャシー松井委員、才藤栄一委員、高田創委員、宮川美津子委員、
宮部義幸委員、矢ヶ崎紀子委員

オブザーバー

内閣官房 伊吹英明 内閣参事官

東京都 松縄宏 参画推進担当課長

組織委員会事務局

古宮副事務総長、

三木チーフテクノロジーイノベーションオフィサー、伊藤CFO兼企画財務局長、

館テクノロジーサービス局長、平田イノベーション推進室長、

石川アクション&レガシー部長

4. 議事次第

【報告】

井伊委員(新任)のご紹介／2018年の東京2020大会に向けた主な活動／
アクション&レガシーファイナルレポート

【議事】レガシー創出および機運醸成に向けたアクション

- ① 東京2020大会のテクノロジー関係およびイノベティブな取組の検討状況
(テクノロジーサービス局より／イノベーション推進室より)
- ② 「地域の魅力発信」プロジェクト<榎田委員・パナソニック>
(榎田委員とホストタウンのポスターによる発信の取組/パナソニックとホストタウンの映像発信の取組)
- ③ 意見交換・フリーディスカッション

5. 議事録

○古宮副事務総長

古宮でございます。ただいまから、東京オリンピック・パラリンピック競技大会組織委員会、第7回経済・テクノロジー委員会を開催したいと思います。

実は、前は昨年の2月に開催をさせていただきました。ちょうど1年ぶりの開催ということになります。少し間があきました。

今回は、昨年度、2018年度の大会全体の動き、それからテクノロジー、イノベーションに関わる検討状況、これを中心に委員の皆様との意見交換をさせていただければと思います。ぜひ、皆様の忌憚のない御意見、意見交換をさせていただければと思っております。よろしくお願いいたします。

本日は、本委員会はメディアにも公開というふうにしておりまして、撮影は冒頭のみでございますけれども、記者の方々は会議中、傍聴・取材可能というふうにさせていただいております。

それでは、会議開催に当たりまして、本委員会の委員長でいらっしゃいます、政策研究大学院大学の田田弘子委員長から、御挨拶をお願いできればと思います。よろしくお願いいたします。

○大田委員長

1年間のごぶさたでした。今日はお忙しいところお集まりいただきまして、ありがとうございます。

早いもので東京大会まで、もう500日を切っております。聖火リレーは、来年の春ですね。福島県を皮切りにスタートいたします。これから、東京大会に関するピックスやニュースがこれまで以上に増えてくると思われまます。

組織委員会では、今年、大会に向けた準備が実行フェーズに入り、夏からはいよいよ各競技のテストイベントの実施や具体的なテクノロジーの大会実装と、本格的な準備が行われると伺っております。

また、政府、東京都、経済界など、さまざまな関係団体による取組も加速してまいります。

本日の委員会では、アクション&レガシープランのコンセプトに基づいた大会のテクノロジーに関わる取組の方向性、及び地域活性化に向けたホストタウンと榎田委員、スポンサーとの連携プロジェクトを中心に御報告をいただき、その後、委員の皆様から多くの御意見を頂戴したいと考えております。

大会まで、残されたあと500日の間に、いかにこの大会を盛り上げていくかということについて、アイデアなども頂戴したいと考えております。どうぞよろしくお願いいたします。

○古宮副事務総長

大田委員長、ありがとうございました。

本日は、大田委員長を初めとする専門委員の方々とオブザーバーとして、政府より内閣官房の伊吹内閣参事官、それから東京都から松縄参画推進担当課長、御両名にお越しいただいております。総勢13名ということで、御出席いただいております。

また、昨年、当方、新たに着任をいたしました、まず、三木泰雄チーフ・テクノロジー・イノベーション・オフィサーでございます。それから、伊藤学司チーフ・フィナンシャル・オフィサー企画財務局長、二人も出席しておりますので、よろしくお願いいたします。

それでは、これから議事に入りたいと思いますので、大変恐縮ですけれども、ムーブスチールの皆様は、退出をお願いいたします。それでは、ここから議事進行は大田委員長をお願いをしたいと思います。よろしくお願いいたします。

○大田委員長

まず、専門委員の交代について、事務局より御説明をお願いいたします。

○石川アクション&レガシー部長

それでは、私のほうから、経済・テクノロジー委員の交代について御報告申し上げます。資料1を御覧ください。これまでのNTT、篠原委員様にかわり、NTTの井伊基之様に委員として御就任をいただきました。

井伊様、今後ともよろしくお願いいたします。

○大田委員長

どうぞよろしくお願いいたします。

続きまして、資料2、2018年の大会に向けた主な活動、東京2020参画プログラムの現状、アクション&レガシーファイナルレポート、レガシー・レポート・フレームワークにつきまして、事務局より一括して御報告をお願いいたします。

○伊藤企画財務局長

それでは、資料2に基づきまして、特にこの1年間の動きと準備状況を含めて御説明をさせていただきます。

1年間の準備状況を10分ほどで御説明をさせていただきますので、飛ばし飛ばしになり大変恐縮でございますが、よろしくお願いいたします。

資料2の3ページのところを御覧いただきたいと思います。この1年間の準備状況として、1から10のそれぞれの項目につき、今、準備を着々と進めているところでございます。

4ページには、競技会場の状況でございますが、競技会場についても順調に大会までは当然でございますが、大会の1年前程度に行いますさまざまなテストイベントも視野に入れながら、着々と今、準備を進めているところでございます。

5ページ、6ページでは、競技スケジュールの決定の御報告をさせていただきます。それぞれの種目、オリンピック・パラリンピックとも競技種目、日程が固まりました。現在は、それぞれの競技日程の中で、より細目でございます。例えば、陸上で言うと100メートル、男子決勝は何日何時にやるか、こういうような細かいところの詰めを今、行っているところでございますが、大まかな日程は全て昨年までに決定をさせていただいたところでございます。

そして、次の7ページを御覧いただきたいと思います。

7ページ、開閉会式についてでございますが、開閉会式については、7ページの下のほうでございます。野村萬斎様をチーフ・エグゼクティブ・クリエイティブ・ディレクターに御就任をいただきまして、8名の全体体制の中で役割分担、また連携をしながらお取組をいただくということで、今、それぞれのオリンピックの開閉会式、パラリンピック開閉会式の具体のコンセプトから演出の段階に検討に進んでいただいている状況でございます。

次に8ページ、聖火リレーについてでございます。

聖火リレーにつきましては、3月12日、もう1年を切りました。2020年の3月12日に古代オリンピア市で聖火の採火式を行った後、3月20日に宮城県の航空自衛隊松島基地に到着し、その後、3月20日から25日までの間、東日本大震災の被災3県である宮城・岩手・福島で「復興の火」として展示し、3月26日に福島県のJヴィレッジをスタート地点とし、全国を聖火リレーでつなぐと、こういう日程になっているところでございます。

また、パラリンピックの聖火リレーにつきましては、オリンピック終了後、パラリンピックが始まる前の期間におきまして、これはオリンピックとは少し違う形で聖火リレーが展開されるわけでございますけれども、できるだけ全国多くの県に御参加をいただくような形でパラリンピックについても聖火リレーを展開していきたいと思っております。

次の9ページを御覧いただきます。聖火台でございます。聖火台については、当然、開閉会式、新国立競技場の中で、式典の中で聖火の点灯は行われるわけでございますけれども、競技が始まりますと、新国立競技場の中でずっと燃やし続けるというわけに構造上いかな部分がございます、大会期間中は、今、ここでお示しをさせていただきます、東京臨海部夢の大橋有明側のところに大会期間中に聖火をともし続ける、聖火台も設置をするということで、開閉会式で使うものと常時、大会期間中、ここで灯をともし続けるもの2台で大会を盛り上げていくということになってございます。

次の10ページを御覧いただきたいと思います。

大会マスコットの決定でございます。大変多くの報道をいただいておりますので、委員の先生方もこのマスコットに大分なじみを持っていただいているのではないかとこのように思っておりますが、オリンピック・パラリンピック史上、初めて小学生がマスコットを選ぶということで、3案の中から全国の小学校に御参加をいただきまして、投票で決めさせていただいたところでございます。

実に、全国の小学校の8割が御参画をいただくということで、これ単なる人気投票ではなくて、事前の準備、事業の中でしっかり話し、オリンピック・パラリンピックとはどういうものかということを学んでいただいた上で、話し合いをしながら決めていくというような形態をとらせていただきました。

その結果、アのものマスコットとして選ばれて、次のページでございますが、ミライトワ、ソメイティということで今、幅広く東京オリパラ大会の広報の顔として活躍をいただいております。

次に、ボランティアの状況でございます。12ページを御覧ください。

ボランティアの募集を始める当初は、非常に条件から厳しいのではないかとこのように厳しいお声もいただいたところでございますけれども、最終的には20万を超える方々に御応募をいただきました。若者もかなりたくさん御応募をいただきましたが、各世代、バランスよく御応募をいただいた。そして、海外からもたくさん御応募をいただいたところでございます。

現在、私ども最終的には8万人程度が必要だということに見込んでございますので、20万を超える方から御応募いただきましたので、事情を聞きながらマッチングということで御相談、どの分野でどう活躍していただけるかというようなことを今、面談をさせていただいているところでございます。

今後、ボランティアが決まりましたら、具体的な研修等も経て大会に臨んでいただきたいというふうに思っております。

13ページに、そのネーミング、これまではボランティアに応募いただいた方で選んでいただいたわけでございますが、大会の運営に関するボランティアはフィールドキャスト、東京都が募集します都市の中でさまざまな都市の魅力等をPRしていくボランティアをシティキャストという名称で決定をさせていただきました。

次に、大会チケットでございます。14ページでございます。

オリンピック・パラリンピック、それぞれのチケットの値段を決定させていただいたところでございまして、いよいよこれからチケットの一般販売に向けて、今、準備を進めているところでございます。

春のうちに何らかの形でアナウンスができればなということで、今、準備を進めさせていただいております。

次の15ページを御覧いただきたいと思います。

15ページは、メダルプロジェクトでございます。オリンピックで金・銀・銅のメダルを当然、授与するわけでございますが、

この金・銀・銅に初めて、今までは新しく当然、通常の鉱山から採掘したものを充てていたわけでございますけれども、使用済みの携帯電話等の小型家電から抽出したりリサイクル金属を使うということで、国民の皆様、幅広く御協力をいただき、そしてNTT様を初め事業者の方にも大変御協力をいただきながら、みんなでこのメダルをつくっていくんだということで、取組を進めさせていただいたところでございます。

これにつきましては、委員の皆様も大変御協力をいただきましたことをこの場をおかりして、深く感謝を申し上げます。お陰様で、ほぼ金・銀・銅については、全て必要量が回収できるということで、この3月31日をもってこのプロジェクトは一旦幕を閉じたいというふうに思っております。

今後、今、メダルのデザインのところを最終の詰めをしているところでございますので、いただいた金属でメダルを公表し、1年前イベント、今年の夏にはそのメダルを公開できるよう準備を進めてまいりたいと思っております。

次に、機運醸成に向けたさまざま取組でございます。後に御説明をさせていただきますが、2020参画プログラムを初め、さまざまな取組をさせていただきまして、皆様にも大変御協力をいただいているところでございます。

次の17ページは、大会の機運を盛り上げるために大会の色であったり、デザインであったりということで、コアグラフィックスというのを決定し、これが大会中は本当にまちを彩り、そして会場を彩る形になっておりますが、徐々にこれから大会に向けて都市のドレッシングも含めて、こうした展開を図り機運醸成を図っていきたく思っております。

また、機運醸成に向けた取組の中で、次の18ページでございます。SDGsということで国連を持続可能な開発に向けた17の目標、これに私ども東京大会もぜひ貢献をしていきたいと、こういうことで合意をし進めているところでございます。

次の19ページは、機運醸成のに向けた取組の中で、オリンピックの公式映画でございますが、河瀬直美様に監督に御就任いただくことが決まったという資料でございます。

次の20ページ、復興に関するさまざまな取組でございます。

先ほどのオリンピックの聖火リレーに先立ち、復興の火とし、被災3件で展示をするとともに、福島県をグランドスタート都市とし全国を回ると、こういうことも含めてさまざまな取組を今、展開させていただいているところでございます。

世界中のプレスの方が日本に今、どんどんこれから来ていただきますので、この機会を通じて被災地のほうに私どもツアーという形で御案内をさせていただきながら、復興している姿というものを御覧いただきながら、また世界にも発信をしていただければというふうに思っております。

1ページ飛んで22ページを御覧いただきたいと思っております。先ほど申しました、参画プログラムでございますけれども、今、現時点で、9万4,600件のアクションということで、本当に全国津々浦々、たくさんの取組を取り組んでいただいているところでございます。

赤い色が非常に件数が多いところでございまして、もちろん東京を中心とした関東が多いわけでございますけれども、オレンジや黄色というのが全国に広がって、本当に各地でさまざまな展開をさせていただいているところでございます。

その中で、個別の事例でございます23ページ以下でございますが、この経済・テクノロジーの関係でもCEATEC東京2020特別カンファレンスということで、ブース出展をさせていただきまして、多くの企業の方々にもこの状況を御覧いただいたところでございます。

また、東京都主催の取組の中では、多言語対応・ICT化推進フォーラムということで、この取組を進めていただいたところでございます。

また、次の25ページには、TDMの推進プロジェクトということで、これもさまざまな業界団体の方に御協力をいただきながら、大会期間中の交通混雑をいかに回避するかということについて、さまざまなシミュレーションをもとに御協力を呼びかけさせていただいているところでございます。

次にアクション&レガシーファイナルレポートというのを簡単に御説明させていただきます。

委員の先生方の御協力をいただきまして、アクション&レガシープランを策定したところでございますけれども、そのアクション&レガシープランに基づいて実行したさまざまな取組というものを大会後、速やかにレポートという形で発信をし、残していきたいというふうに思っております。

27ページにその構成が書いてございますが、初めに、第1章という総論から始まりまして、各章で展開をしていきます。第5章で、経済・テクノロジーということで、この委員会の委員の先生方から御指導いただいて、取り組んださまざまな取組内容をここに残していきたい。

また、取り組んだ事業だけではなくて、世界がそれでどう変容したのか、どうポジティブな影響を与えられたのかということもできる限り、これは定性的なものだけではなくて、具体的な数字などの取り得る限りとりながら取り組んでいきたいというふうに思っております。

最後に、レガシー・レポート・フレームワークということで、1枚書かせていただきました。これは昨今の大会の新しい動きでございます。

IOCのほうでは、レガシーをいかに残していくのか、大会期間中だけのイベントで終わりではなくて、それがどうインパクトを与えたのかということで、持続可能性に関する報告書というものを策定するようという今、方向に転換をいたしております。

このため、大会が終了して、しばらくたつと我々組織委員会自身は当然、解散をするという形になるわけでございますけれども、国や東京都ともよく連携をしながら、このレポートのフレームワークというものを今後、つくっていきたくというふうに思っております。

大変駆け足で恐縮でございますが、以上がこの1年間の報告でございます。

○大田委員長

ありがとうございました。

全体の意見交換は後でさせていただきますが、今の御説明に限って、御質問、御意見ございましたら、どうぞ。

(なし)

○大田委員長

よろしいですか。もしありましたら、また後でお出しただければと思います。

それでは、ここから議事に移ります。お手元の資料3を御覧ください。1枚紙です。

ここに、皆様にお決めいただきました経済・テクノロジー分野のレガシーコンセプトが書かれております。それぞれの課題について、今、取り組んでいただいている取組の方向性が書かれております。

まず、組織委員会テクノロジーサービス局及びイノベーション推進室より、この取組の状況について、資料の4と5を使って御報告をいただきます。よろしくお願いたします。

○館テクノロジーサービス局長

それでは、まず、テクノロジーサービス局の取組みに関しまして、館のほうから報告させていただきます。資料1枚おめくりください。

本日の御報告ですが、実は昨年6月にテクノロジー諮問委員会という外部委員会の提言書を発表してございますので、その内容に沿った形で報告させていただきたいと思っております。

テクノロジー諮問委員会の説明を簡単に書いてございますけれども、実は個別具体的なかなり施策案を事務局のほうから提示する形で全8回にわたって議論をさせていただきました関係で、かなり実際に事務局が用意している施策とかぶったといいますか、それにかぶせたようなアイデアのアドバイスをいただいておりますので、大きく3章構成で今日は報告させていただきたいと思っております。

アジェンダは次のページにありますとおり、大きく大会運営の観点、それから大会観戦の観点、そして最後に大会レガシーの観点という三つのテーマに沿ってテクノロジーの準備状況を報告させていただきます。

めくっていただきまして、大会運営の観点でございます。まず、課題認識でございます。大量の物品調達や人の移動・輸送を伴う大会運営業務、警備業務などにおいて、最新のITを活用した運営の効率化・スマート化は、組織委員会が取組むべき最優先課題です。

東京大会として大事なポイントは、最先端の技術でも、いかに人にやさしく、現場のボランティアや観客の悩みを解決できるかでございます。

この中で、下に個別、具体的な取組を少し例として挙げてございます。特に、赤太字で書いてございますのが、今現在、組織委員会が準備中、あるいは取組中のところというふうに御認識ください。

例えば、大量に物量・輸送をスマートにこなすということに関しましては、交通データ分析、いわゆるトラフィック・デマンド・マネジメントに基づく渋滞予測をやってございます。

それから、現場ボランティアを支えるモバイルアプリケーションの開発、それから、観客の快適をサポートするAIということで、この後、イノベーション推進室からの報告がありますロボットへの取組ですとか、チャットボットによる迅速な問い合わせ応答。

それから、報道発表も昨年されてございます。会場の警備をサポートするという観点で、生体認証技術の活用も進めてございます。

次のページ、特に今回、報告の中に取組み1として入れさせていただきたいのが、大会運営業務を支える、こういった各種システムが実は100個近くアプリケーションの開発を今、しているところですけども、大会運営をスマート化するために、こういった最新技術の採用だけではなくて、むしろもう少し地道な活動なんですけども、最適な業務フローの設計ですとか、データモデル定義といった組織全体として業務、開発などに関するフレームワークの確立というところに力を置いて進めてまいりましたということの一つ御報告させていただきたいと思っております。

その下に書いてあります、イベントオペレーション、スポーツオペレーション、ファシリティオペレーション、ビジネスオペレーション、これが実はオリンピック大会を運営するための4大業務カテゴリでございまして、このカテゴリに沿って、それぞれ最適なアプリケーションを開発してきたというふうに御理解ください。

次に、大会観戦の観点でございます。最新技術の活用には、アスリートの最高のパフォーマンスを可視化するためのテクノロジーとしての観点が重要です。

また、ソーシャルメディアのトレンドを捉え、デジタルコミュニティにおける大会のポジティブな情報発信を狙うべきです。ということで、例えばアスリートのパフォーマンスの見える化、この辺りは実は毎年毎年新しいこういったスポーツテクノロジーというものが世の中に出てきて、オリンピックの中でも例外なく今、採用が進んでございます。

こういった最新のセンサー技術、計測技術を競技運営の中に活用しつつ、それをわかりやすくビジュアル化することによって、観戦者の人にも楽しんでいただくということが今回、東京大会のほうでもかなりプロジェクトが進んでございます。

それから、会場の興奮のシェア、世界中の応援の可視化という意味では、アスリートからのSNS情報発信といったものも今、実は非常にIOCのほうからも力を入れている分野でございます。

そして、最後にデジタルコミュニティにおける情報発信ということで、SNS上での積極的な情報発信ですとか、コミュニティをよりオープンに巻き込んだ自発的・ポジティブな情報発信ということも広報局を中心に今、取り組んでおると

ころでございます。

次のページに書いてございますのが、実はIOCによる分析データになりますが、過去大会でも何年か前から、いわゆる組織委員会の公式Webサイトのアクセス状況というのを詳細に分析してございます。

IOCの分析に基づきますと、東京大会というのは、やはり史上最もインターネット経由でコンテンツがアクセスされる大会になるということは、容易に想像はつくと思うんですけども、前回、リオがどうしてもスマホの普及率が低いですが、特殊な事情もございましたので、ロンドン大会が今までは一番実績があるんですけども、東京大会はもう既に軽く超えるだろうという予測が出てございます。

こういう状況を受けまして、次のページにございますとおり、大会公式モバイルアプリケーション、これの主に競技観戦に来られるお客様に対して、競技結果の迅速な提供ですとか、会場周辺のナビゲーションですとか、さらにはほかにはない魅力的なコンテンツ、こういったものをバランスよく配置して大会本番のときには、今のところグローバルに2,000万ダウンロードを計画してございます。準備中でございます。

それから、最後に大会レガシーの観点でございます。競技場のICT環境のようなハードウェアだけでなく、テクノロジーを使いこなして醸成される文化的側面としてのソフトレガシーも重要です。

例えば競技場のIOC環境整備も、スポーツツーリズム振興や防災拠点整備といった文脈の中で語られるべきと考えます。

産業界から見た東京2020大会への期待に応えるためにも、組織委員会からの積極的な提案と情報発信を期待しますということで、具体的には、競技場のICT環境に関しまして、今、Wi-Fi整備、それからデジタルメディアでの地域情報発信というところに取り組んでございます。

それから、最後に書いています、大会後のレガシープログラム、これは前回は報告させていただいたと思います。大会が終わった後に、観戦者ですとか、ボランティアの情報が貴重なデジタルレガシーとして残りますので、それを次のスポーツ振興プログラムへ引き継いでいくという活動も視野に入れて今、活動を実施してございます。

次のページに、簡単にその一つを紹介しておきます。若い世代の参画促進プロジェクトということで、昨年3月に第2回目のアイデアソンイベントということで、写真にもございます。夏野剛様にも御協力いただきまして、観客用モバイルアプリの設計に、学生のユーザ目線を取り入れることというイベントを行いました。

今年もVol.3として、実際にアプリケーションのプロトタイプ作成まで実施する企画を今、準備中でございます。

最後のまとめでございまして、これも諮問委員会の提言書のほうから引用させていただいております。テクノロジー×インクルージョンということで、日本は特に欧米と違ってロボットを異物としてではなく仲間としてとらえる文化があるということで、人とテクノロジーとの共存というのを根底にあるメッセージ、フィロソフィーとしてはどうですかという提言をいただいております。

それから、最後に、結果がイノベティブの大会にするためには、そこに至るまでのプロセスがイノベティブでなければならないということで、テクノロジーサービス局、実は縁の下の力持ちな位置づけではございますが、なるべくこの言葉を肝に銘じてスキームをもっとオープンにして、学生さんも巻き込んで今、準備活動をやっておりますところでございます。

以上です。

○平田イノベーション推進室長

続きまして、資料の5を御覧ください。イノベーション推進室の取組といたしまして、イノベーション推進室の平田から御説明させていただきます。

東京大会は、この紙に書かれております大会ビジョンを4年前に発表しております。

スポーツには、世界と未来を変える力があるということで、1964年の当時の東京大会は、いろんな意味でレガシーを残し、日本の経済成長を支えたというふうに言われておりますので、私たち組織委員会といたしましては、大きく三つのビジョンを出しております。

一つが、全員が自己ベスト、それから二つ目が、多様性と調和、三つ目が、未来への継承でございまして。

これ、一つ、一つが、みんなが参加をし、それからいろんな違いを認め合って協力をし、かつ最後に未来に遺産を残していこうということでございます。

この三つの基本コンセプトの上で、史上最もイノベティブな大会にするんだということで、世界にポジティブな変革をもたらしたいというのが基本的な大会のビジョンでございまして。

イノベーション推進室は、2年前の2017年の4月に設立されました。最もイノベティブの大会にするために何をすればいいのかという議論をイノベーション推進室だけではなくて、いろんな関係しているFAと呼ばれているファンクションエリアの組織委員会の中、それから東京都であるとか、あるいは国とも議論をさせていただいております。

その中で、今、現時点では、この三つの視点で打ち出してはどうかということに、今、結論づけております。

一つは、スポーツのイノベーションということでございます。これは、スポーツそのもののイノベーションというものも含まれますけれども、一つはわかりやすい例でここに書いてございますけれども、やはりスポーツの新しい楽しみ方、見方というものが一つございます。

ここには、当然、テクノロジーを駆使したデジタル技術を使ったものも含まれているわけではございますけれども、例えば例で書いてございますけれども、従来ですと単に会場でスポーツを見るだけだったということですけど、例えば今回、アーバンスポーツだとか、サーフィン会場などでは、イベントと一緒にそこで開催をし、来た人たちがスポーツを見るだけではなくて、自分で何かイベントに参加したりして楽しむ、そういったテクノロジーだけではないんですけども、新しいスポーツの楽しみ方、こういったものを提唱していきたいというのが1点目でございます。

それから、2点目でございますけれども、参画におけるイノベーション。これは、先ほど御紹介ございましたように、例

えばマスコットの子どもたちによる投票、これは全くテクノロジー的に関係ございませんけれども、実際にはこういったみんな参加する大会ということを出し出すという意味では、過去大会にない新しい参画スタイルというものをいろんなところで出していきたい。もちろん、メダルプロジェクトもその一つでございますし、今日は発表の中にございませぬけれども、今、館局長のほうからもございましたように、応援して盛り上がる、そういったような盛り上げも参画という意味ではイノベーションのアイデアの中に今、検討している最中でございます。

それから、三つ目がいわゆるレガシーを残すということでございますし、未来を変えていきたいということでございます。日本の社会において、課題だと言われておりますバリアフリーの社会の到来であるとか、持続可能性への配慮、こういったさっき伊藤CFOのほうからもありましたように、心がけ提唱している17個のSDGs、こういったものに対応することはもちろんでございますけれども、ここで行われること、あるいはここで始まるものが将来、未来を変えていくといった、そういう素材を提供していくということだと思っております。

この三つの視点全てを組織委員会の中で、全部やるということではございません。これは、大会を契機に、あるいは普通の企業の方、あるいは国、東京都、そういった方々がそういった目線で物を提供していくということで、それぞれ新しいイノベーションがそこで始まるんだということで打ち出していききたいというふうに考えてございます。

今日、タイトルが東京2020ロボットプロジェクトということになっているんですけども、実はまだイノベーション施策の多くが皆様の前に具体的にお出しできるようになっていないという、ちょっとそういう残念な状況がございまして、その中でいろんな期待値が高く、先ほどの館局長のほうからもございました。ロボットがいかにか人間社会に活用されているかという期待値が非常に多くございますものですから、私どもとしましては、いろんなところからそういう問い合わせが来りました。

そういう意味で、ロボットについては一部、具体的に発表できる段階に参りましたため、先ほどの三つの視点、それぞれに関わる一つの施策として、今回、ロボットというものを先週の金曜日にプレス発表したものでございます。これは、テレビ等で御覧になった方も多と思いますけれども、それについて今回、簡単に御紹介をさせていただきたいと思っております。

続いて、プロジェクトのねらいを御覧ください。

先ほど、申し上げましたとおり、世界中の人々が注目する東京2020大会というのは、どうもロボット大国ではないかという声が強くて、いろんなところでロボットが出てくるという期待がございまして。

ただ、私たちは、今、いろんな有識者の方々、あるいは国、東京都の方々などとお話をした結果、やはり日本が見せるべきロボットというのは驚きのロボットということよりも、やはり人間の生活に寄り添って役に立っているという姿を見せつけることではないかという結論に至りました。

そういった意味で、見かけは非常に地味なものでございますけれども、そういった人の役に立つもの、そういったことを見せたいというのが基本的なコンセプトでございます。大会を契機として、ロボット社会が到来することを世界中に発信するというのが狙いでございます。

次のページを御覧ください。

この議論そのものが、ここに簡単に書かせていただいておりますけれども、有識者から政府、東京都、それから大会のパートナーでございますパナソニック様、トヨタ自動車様、この2社につきましては、実は組織委員会はスポンサーのカテゴリーというもので守られてございますけれども、ロボットというのはこの2社のカテゴリーになってございますので、大会パートナーとしてこの2社が入った形で検討してまいりました。

これにつきましては、まだ公式にこういったWGをやってきたということではなっておりませんけれども、幾つか非公式に皆様の意見を1年ぐらいかけてディスカッションを重ねてまいりました結果が先ほどのような見せ方をしようじゃないかという結論に至りました。

これからの課題としましては、政府、東京都、それぞれいろんなロボットプロジェクトを御推進されておられますので、こういったものと同様にベクトルを合わせていくのか、東京大会として一枚岩で見せられるのかということについての議論が、これからの中心になっていくと思っております。

次のページに、有識者の先生の御紹介をさせていただいておりますけれども、いろんな方にお伺いすると、比留川先生、佐藤先生、このお二方がロボットの中では非常に権威の方であるという御意見をいただきましたので、この二方を中心に、それから杉山先生、これはAIの権威の方でございます。やはり、ロボットというと、AIということになると思いますので、こういったことの組み合わせも含めて、この3人の方及び先ほどの国、東京都、そういった方々の議論で今後のロボットをどういうふうにしていくかということについて、これからさらに深めていきたいというふうに考えてございます。

次のページがスケジュールでございますけれども、実は先週の金曜日に発表しましたのが、後でちらっと、次の次のページに出てまいりますけど、今、出すのは一部のロボットのプロジェクトでございます。

今後、秋、冬にかけて具体的なロボットの検討が進んでおりますので、それを第2弾、第3弾として発表していきたいということでございます。

今回は、次のページに書いております、二つありますが、トヨタ様がお出しになっております生活支援ロボットというものと、これは今のところ新国立競技場オリンピックスタジアムで車いすの方々に食事や飲み物をサポートするというコンセプトでつくられたロボットでございます。

これは、まだ開発中でございますし、完成品ではございませんけれども、できるだけ多く出展したいということでございましたが、予算の関係であるとか、あるいは場所の問題等から現在16セット、これは32席に車いすの方が補助者とともに訪れるという想定で32席に16セットで対応していきたいというコンセプトでございます。

それから、最後のページがパワーアシストスーツということでございます。これは、新聞発表と新聞記者の皆様からいろんな質問が出たんですけど、これは既にパナソニック様が商用化されている製品でございますけれども、あくまでも、やはりいろんな現場で使われているんですけども、オリンピック・パラリンピックの世界でこういったものを活用し、例え

ば重量挙げのおもりをつけたり外したりという、こういった地味なところでも競技支援という形で使われるのが過去に例がありません。

一部、パラリンピックの競技で使われている事例はございますけれども、それを今回、多く展開をして、こういったものが人間の役に立っているんだというふうに見せていきたいということでございます。

最後に、もしかすると画面のだけ出ていると思いますけども、3月15日に発表させていただいた写真が簡単に4枚ほど出ておりますけれども、先生方にも御登壇いただき、トヨタ自動車様、にも御登壇いただきまして、約60社に及ぶ世界からも来られたメディアの方に非常に大きな注目をいただきました。ありがとうございました。

私から、以上でございます。

○大田委員長

ありがとうございました。

では、ただいまの二つの御説明に関して、御意見、御質問などありましたら、お願いいたします。

高田さんは、早目に御退出とのことですので、全体を通して何かありましたらお願いいたします。

○高田委員

貴重な機会をいただきまして、ありがとうございます。また、御説明、どうもありがとうございました。

今、伺っております、本当にもう1年ちょっとなんだなという思いを非常に新たにいたしました。

前回の64年のオリンピックが途上国から先進国というような局面であるとすれば、今回の場合は成熟社会へという形なんだろうと思います。

そういう意味で言うと、やはり高齢化ですとか、それから持続性というような観点が非常にということもあります。先ほど御説明がありましたSDGsですとか、そうしたところ辺りが非常に重視される世の中でございますので、そういう点は非常に重要ななと思いますし、また、そうしたものを高齢化でありますか、持続性の先進国として新たな日本を示していく、ニュージャパンというんでしょうか、そういうコンセプトが重要なんじゃないかなというふうに思いました。

それから、先ほど経済・テクノロジーのレガシーといろんな議論があつたりしましたが、ちょうどもう1年ちょっとという中で、私は今年の位置づけというのは非常に重要なのではないかなと思っています。

そういう観点から言うと、直接絡むわけじゃないかもしれないんですけども、これだけメディア、海外からという機会はないわけでありまして、というのは一つは、改元という部分がございます。これも実は非常に、これは直接どう結びつけるとかというのは、なかなか難しい問題はもちろんあるかとは思いますが、しかしながらこれだけ従来から改元というのは新たな時代ということでもありますので、そういうところと一つ歯車を合わせていくというのは一つ重要なのではないかなと思います。

それから、G20が今年議長国であるわけでありまして、先ほどのSDGsでありますとか、もしくは高齢化の議論でありますとか、特に金融インフラのところでありまして、高齢化の議論でありますとか、今回のG20の中の項目、例えばインクルージョンであつたりとか、今回のオリンピック・パラリンピックと非常に重なる部分が私は多いのではないかなというふうに思うんです。

ですから、G20、まさに今回、議長国であるという初めての対応ということでもありますし、また、共通する部分が多いといたしますと、こうしたものをいかにその場を通じて発信をしていくかということも、やっぱり重要なのではないかなというふうに思いますし、また、今年の場合はラグビーワールドカップがこの秋にあるわけでありまして尚更です。

どうしても、東京オリンピック・パラリンピックの場合は東京中心としたところということになるわけなんで、しかしながらG20ですとか、ラグビーというのは、全国のところで比較的地域も含めた広がりがありますので、そういう観点からもこういうものを広げていくというのは非常に重要なのではないかなというふうに思うところでございます。

最後になりますけれども、今回の参画プログラムのところですか、また、こういったようなものをより外に広げていくということからいたしますと、従来も申し上げたんですけれども、やはり広報活動をもう一回、特に今こそ今年にかけてということと言うと、在外公館のところを通じて、今申し上げたような改元、G20、ラグビーと、それに合わせて幾つかの中で、要はこの日程の中でこれをどう位置づけていけるかということが重要です。

それから、インバウンドもこれだけ昨年は3,000万人を超えたという画期的なところにもなっております。

そういう中で、入り口となる空港でありますとか、港湾でありますとか、そうしたところ辺りのPRというんでしょうか、非常に重要なところではないかなと思っております、そんな点を総動員できる、まさに新たな日本をという年に今年、いろんな意味でできる年ではないか、それをぜひとも活用していただければなと、そんな思いでございます。

○大田委員長

貴重な御意見、ありがとうございました。
ほかに御意見、御質問ございますでしょうか。才藤さん。

○才藤委員

ロボットの件なんですけど、非常におもしろいなと思うんですが、パラリンピックの中で、さっきの人に寄り添うという意味では、ロボットを使った競技みたいな話は出てこなかったんでしょうか。

というのは、サイバロンといって人間がいろんな道具を使ってやる競技大会、結構おもしろいのが動いているんですけども、ロボットだけに限ってやる手は僕はあると思うんですね。

例えば、両足完全麻痺の人がロボットを使って100メートル走るなり動くなりとか、そういうような話は結構おもしろいですし。例えば、電動車椅子を使ってスピードレースするとか、幾つも手があるとと思うんですけども、いかがですか。

○平田イノベーション推進室長

平昌大会では、大会とは別にスキー場でロボットだけのスキー大会というのが行われたという事例がございまして、今、内部ではそういったロボットと一緒に競技するとか、あるいはロボットだけの競技大会という案も出てございます。

○才藤委員

僕が言っているのは、ロボットと人、要するに障害者が使ってゲームをするような、そういうことが例えばパラリンピックだと、もう少し進んだ障害者の生活を反映するので、そういうのがおもしろいかなとは思っています。

○平田イノベーション推進室長

ありがとうございます。

正直申し上げて、今までまだその検討まで至っておりませんが、貴重な御意見として検討の、WGの先ほどのメンバーの中にフィードバックさせていただきたいと思っております。ありがとうございます。

○大田委員長

ぜひ、御検討をお願いします。
ほか、いかがでしょうか。

(なし)

○大田委員長

それでは、また後で、まとめて意見交換させていただきます。

続きまして、もう一つの議事であります「地域の魅力発信」プロジェクトについて、御議論いただきます。榎田委員及びパナソニックによる地域の魅力発信プロジェクトとホストタウンの連携についてです。

前回、榎田委員から内閣官房のホストタウンの取組とも連携した中高生の取組を御紹介いただきました。2018年度も対象校を拡大し、ホストタウンを学生が映像で発信することも新たに取組んでいただいているようですので、御紹介、よろしく申し上げます。

○榎田委員

私のほうから、ホストタウンの認知を高めることで、オリンピックとの関わりを国民がもっと深めていくというような試みになります。本日、会議内の投影のみとなります。、最初に今、御覧になっている写真は実はオリンピックのポスターではないのですが、これは、2011年に我々が初めて中学生や高校生にポスターをつくってもらったきっかけになったのが、このポスターです。

これは、タイトルのとおり、絶望に向かい希望を拾うと書いてありますが、被災地の中学生たちが、流されてしまった学校に自分たちのものを探しに行くという姿を学校の先生が捉えて、この写真と言葉を添えて送って来てくれたんですね。

それにタイトルをつけて、皆さんにもお見せしたら、すごい反響があったと、だから、このポスターのつくり方というのをじゃあ、高校生たち、中学生たちに教えたらいいんじゃないかということがありまして、このポスターというものはやってまいりました。

ホストタウンの人たちが心から相手国選手の応援をしたいと思うようにするということは、すごく大事なことだと思っております。

ですけども、行政の人が一生懸命やっていますけども、一般の市民の人たちは、よくわからないという状態がたくさん

あります。これがホストタウンの人たちの一番の多くの悩みかな。

じゃあ、どうやったら相手国の選手の応援をしたいかということ、これはオリンピックの盛り上がりにも関わってくると思うんですけども、やっぱり相手の物語をちゃんと知るといことだと思っんです。

その相手の物語を取材させるのが中学生・高校生。それをポスターなり映像なり、映像は短いものですね。というもので、しっかりと端的に相手の物語が共感できる形で伝えていくということがすごく重要だなというふうに思っています。

また、その力が自分たちの地域、もしくは自分自身の価値に気づく、そういった技術としてもレガシーとして残っていたらなというふうな狙いでやってきました。

平成29年度、初年度ですね。昨年御報告をしたときには、野田村と静岡市ができていました。その後、飯館村が来たんですけども、平成29年度は、大体46枚。平成30年度、これは雫石町、飯館村、野田村、静岡市、徳島県を含めて平成30年度は66枚、合計112枚のポスターができています。

この右側にあるのは、ポスターの指導しているところを取材していただいたところです。

何せ数が多いので、たくさんはお見せできないんですけども、少し御紹介します。これは「ただいま」という、これは飯館村ですね。去年の4月にやっと村に帰れるようになって、ここの校舎を使えるようになったんです。この校舎は、震災で使われていなかったんです。改修と除染が済んだ段階で、戻れたと。そのときに、まず自分たちの生活を自分たちで言葉にしてみなというようなことでやってもらったら、こういうことが出てきました。

こういう「ただいま」とか、やっぱり自分が小学校のときですけどね、小学校の小さいときに避難せざるを得なくなった子たちだったんですけども、それぞれの思いがやはりポスターに載るといことがありました。

これも津波の被害を受けた岩手県の野田村で、中学生たちがやっぱり野田村の「現在を未来に伝えるその1」、実はその2まであるんですけど、いろんな取材を重ねながら、こういったポスターをつくっている。

取材を重ねるごとに、自分たちの地域で知らないところがたくさんあった、知らない人たちがたくさんいた、でもすばらしい、あ、こんなところだったんだ、野田村という気づきが起るようになります。

これは雫石町ですね。この方は、実は引退なされたんですけど、パラリンピアンで金メダルをとった人で、ドイツの方なんですけども、この方は雫石町に来てくださって、要は高校生と中学生の取材を受けてくれました。そのとき、非常に熱心に話をしてくれたものですから、高校生や中学生たちがオリンピック・パラリンピックはこういうことなんだと初めて理解したというような。あと、国際的な感覚、これに初めて触れたという、そういうことです。その感動は多分、強い情熱を持つことがつくれた生徒のテーマだったと思うんですけど、これをタイトルにしてきたという、こういうことですね。

これは静岡ですね。「練習のピースを拾い集め結果のパズルを積む」というタイトルは、このインタビューの中から出てきた言葉なんです。このポスターというの、結構、これは静岡市が台湾の陸上のチームとホストタウンの、要は契約といひますか、そういう関係になっていまして、中学生が取材したんですね。日本に来ているときに取材しました。

そうしたら、そのポスターを静岡市の人が台湾に持っていったんですね。そうすると、選手がこういうふうに物すごく喜んでる。自分が写ったポスター、こういう形で。取材を受けなかった選手は、何で僕のがないんだということになるぐらい、非常にこれはうまくなっていて、これは向こうのメディアに出たものを僕が訳したものなんですけども、たくさんメディアにやっぱり取材されて、こういうことを日本との交流ができていっているということが台湾の人にも随分知れ渡った形になっています。

結果、こういう形、一番僕が望んでいたことですね。やっぱり中学生・高校生が五輪というのは、すごい体力のある人がやるだけのことでなくて、自分たちがあらゆるジャンルに関わっていけるものなんだということを初めて知ったという状態です。

116といひましても、全然足りないんですね。本当に日本中でこういうことをやってもらわないと、やっぱり困るかなと。ただ、そのときに、僕一人じゃとても対応できないんで、カリキュラムをつくってそれをプログラミングしてテクノロジーの力で講座ができないかとかいことがやっぱりこれは講座をやっている中ですごく感じたので、そういった御相談ももしい言っただければ助かると思ひます。

僕からは以上です。

○大田委員長

石川さん、続けてお願いします。

○石川アクション&レガシー部長

榎田さん、ありがとうございます。

前回、2月に榎田さんからも御報告があり、かつホストタウンとパナソニック様の御協力をいただいて、取組を東京2020と絡めて継続をしております。

資料6を御覧いただきたいんですけども、後ほど少し映像も御覧いただきたいというふうに思ひます。これは、榎田さんに御協力いただきまして、榎田さんの講義を受講して、何回も経済テクノロジー委員会で議論しておりましたところ認知開発力を学んだ上で、相手国であるラオスの方々を迎え入れる、ポスターと各ホストタウンの方たちに目を向けました、地域の魅力を発信する5分の映像作品作りチャレンジして、パナソニック様の取組であるKWN日本コンテストへ作品提出する取組でございます。

今回、福島県の飯館村の中学校の皆様作品が見事に中学生部門でKWNの枠組みに入賞されました。

今回は、それ以外にも徳島商業高等学校、あとは岩手県の野田村の中学校が3校で、今回は実施をしました。

2月の末にホストタウンサミットで、福島県の飯館村中学校が映像制作活動と作品を上映して、今日、内閣官房様にも御出席いただいておりますけれども、完成した作品は官房から自治体と連携してホームページでも全体の取組を

一応、公開をすると、地域の魅力の発信という観点から、こういったものを公開しようということで動いております。

具体的には、下のコンテスト取組結果ということで、ホスタウンの取組とKWNパナソニック様の媒体としてのものと、これを東京2020と連携をした形での公認プログラムとして、この取組自体を認証させていただいております。

冒頭、今、申し上げたとおり、飯館中学校の映像の一部を少し御紹介させていただきたいと思っておりますので、よろしくお願いたします。

(映像上映)

○石川アクション&レガシー部長

このような映像を制作いただきまして、引き続き内閣官房様を通じて、ホスタウンの相手国にこういった映像を伝えたり、取組をホスタウンに紹介したりすることなどを検討させていただいておりますので、2020年に向けまして引き続きよろしくお願いたします。

以上でございます。

○大田委員長

ありがとうございます。今のものは中学生がつくったんですね。すばらしい。

大変すばらしい発表をいただきましたが、御意見、御質問でございますでしょうか。

(なし)

○大田委員長

最後に、資料7に、全体のスケジュールがあります。事務局、説明をお願いいたします。

○伊藤企画財務局長

資料7の資料でございますけれども、大会本番に向けてオリンピックのほうは500日を切ったところでございますが、それまでの間に、どのようなイベントがあり、どのような決め事を決めていくかというものを、全体を鳥瞰していただけるような形でつくっているものでございます。

横軸が期間をとって、縦軸のほうに項目を掲載させていただいているところでございます。ちょうど今、2018年度の1～3月期ということで、オレンジの500日前の帯に入ったところという状況でございます。帯の500日前が3月12日に先週迎えまして、パラの500日前が4月13日ということでございます。

ここから、一年半の間に、さまざまなことを決定し、また機運を盛り上げるために、さまざまなものを事業展開していくことを1枚で示したものでございます。

一例で申しますと、上から二つ目の縦軸の帯でいきますと、二つ目、テストイベントということで書かせていただいております。テストイベントは、6月の末ぐらいから7月、8月、9月にかけて、ちょうど大会1年前に同じ環境のもとで競技を実施してみるということで、Wave①というのが、この時期に来、さらに秋にWave②、そして競技場等の関係で、まだ完成しないので、年を明けてからテストを行うものをWave③と、こういうことで展開をしていきます。

ここでは、競技大会を実施するのはもちろんでございますが、大会本番に向けて運営のほうがうまくできるかどうか、特に例えば計測器を中心としたテクノロジー関係の機器が上手に計測はできるか、ミスが起きないかどうか、こういうことも確認をさせていただくというのが、このテストイベントの時期でございます。

また、真ん中から一つ下のところで、チケットということで掲載をさせていただきます。チケットは、一般向けのチケットの販売ということで、この4月から6月の間に、一般向けを販売していくということで、最初は当然抽せん、かなりたくさんのお応募をいただくと思っておりますので、抽せんの受付から始まりまして、その後、抽せん後でまだチケットを購入できる部分については、先着順の販売のほうに向かっていくと、このような形でございます。

それぞれのところで、さまざまな事業展開を今後もしていきたいというふうに思っておりますけれども、いろんな機運醸成に向けての取組についても、こうしたもののスケジュールを見ながら、組織委員会としての展開をしていきたいと思っておりますし、パートナー企業の皆様を初め、関係ステークホルダーの皆様にも、こういうような前提のスケジュールをにらみながら、さまざまな取組というものを一緒に展開していただければありがたいと思っております。

資料7の説明は以上でございます。

○大田委員長

ありがとうございました。

もう一つ、前回、開催2年前に合わせたNTTのプロジェクションマッピングの事例を御紹介しましたが、お手元の資料にありますように、パナソニックも500日前に合わせて、プロジェクションマッピングを用いた映像体験価値を提供するイベントを実施されるということです。

これは、高速追従プロジェクションマッピングで、野球のスイング、サッカーのパス、卓球のラリーといった動きに合わせた演出を行い、スポーツ体験をこれまでにない形で可能にするということです。21日から4日間、有明のパナソニックセンターで開催されます。

それでは、ここから、自由な意見交換に入りたいと思います。これまでの全体の御説明を通して、あるいはいろんな取組を普段見聞きされてお感じになっていることをお話いただければと思います。

今、御説明あったように、大変いろんな活動が行われているわけですが、正直なところを申し上げますと、普通に生活していると、何かいま一つ刺さってこないといえますか、出会えていないという感じがいたします。

それから、経済・テクノロジーのレガシーとして、私どもが議論した大テーマは、「ジャパンブランドの復権」です。いろんなテクノロジーが紹介されましたが、これが「ジャパンブランドの復権」に本当につながっているのだろうか。こうした技術を、ここで全体としてアピールするには、どうしたらいいのだろうかという問いがあります。

それから、先ほど榎田さんから、オリンピックは参加するものだというお話がありましたが、ホストタウンがまだまだ不足している状態です。全体が盛り上がっていくような雰囲気はどうしたらできるのだろうか。何か皆さんのお感じのこと、アイデアなどありましたら、ぜひ、御自由に御意見をお出しいただければと思います。

どうぞ、どなたからでもよろしく願います。

宮部さん、何か補足も含めてありますか。

○宮部委員

先ほどは、一つはロボットの話、もう一つは子どもたちの映像の話と二つありました。

ロボットは、人と共存するという難しさがすごくある。これは、非常に地味ですけども、技術的には人が立入禁止のところ動くロボットと人がたくさんいるところ、あるいは人が装着して動くロボットは、安全面等とのところで雲泥の難しさがある。

そういう意味では、地味ではあるかもしれませんが、今回、トヨタ自動車様も、私どもも、実際に人と接するところを御披露することができるというのは、従来のロボットテクノロジーとは違ったところだと御理解いただければと思います。

先ほどありました障害者の方が装着してというロボットも、個別にクリアすべき課題がある、難しい領域だと思います。

もう一つの映像は、私、たまたま去年ですかね、このプログラムに関連した高校生が映像制作する場に立ち会ったことがあるのですが、私も高校生のころに文化祭で映画をつくった記憶があるのですが、そのときは8ミリフィルムで撮影して、現像ができ上がってくるのを待って、はさみで編集する。ましてやテロップなんて入れようと思うなら、大変な話だった。

そういう記憶を高校生に話したら、「えっ、何それ」という感じで、一蹴されたんですけども、テクノロジーの進化によって、私たちの年代が想像する以上に映像は、ものすごく身近な存在になってきています。映像をつくることは、身近な存在になっているので、才能のある人たちにそういう道具を与えるとすばらしい成果を出してくれるということ。

今回、これがホストタウンと連動させるという取組は、私はそういう意味でも、テクノロジーの進化が裏打ちした活動じゃないかなと思っております。

これだけでいいのかという話を大田委員長からございましたけれども、本来ならばオリンピックに世界中から日本中から来ていただく方がこの大会開催期間中に東京都内で観戦をして、場合によっては観光して、食事をされるところ全般にわたった利便性を高めるようなところが出ればよかったのかもしれませんが、そこはまだ少し課題を残しているのかなという感想を持っています。

○大田委員長

ありがとうございます。ほか、いかがでしょうか。キャシーさん。

○キャシー・松井委員

すばらしいプレゼンテーション、ありがとうございます。まず、ちょっと頭に浮かんできたことが何点かありまして、一つは、資料3のところの右側のテクノロジーの下のほうの高信頼・高品質の安全というところで、サイバーセキュリティのところですけども、もちろん今まで発表されたものは物すごくすばらしいことばかりですけども、結局、こういう世界中から集まる方々プラスすごいこれはハッカーとしては大チャンスというような機会でもありますので、もちろんこれはレガシーのコミュニティのところではないと思いますが、その辺のどういう対応をしていくのかどうか。

2点目は、大田委員長さんがお話したことも正直、私、外国人として30年以上、日本に住んでいて感じるのが、どちらかといいますと、日本人の友達より海外の友達のほうがオリンピックですごい興奮というか、エキサイトされている感じがしまして、本当におっしゃるとおり、どういうふうに日本人、もちろん東京都内だけではなく、全国中の人たち、もう少し盛り上げることはできるかと、具体的なアイデアは正直ないんですけども、多分、海外の人が日本に来て、すごくすばらしいというか、レガシーを残しものとしては、もちろんロボットはロボットですけど、例えばすごい交通の便利さ、すごい車を使わなくても電車でもどこでも行けることとか、あとは環境ですね。多分、64年のオリンピックで、まだすごい障害のポリューションという国の状態だったから、随分、その後、改善したわけですけども、それも今、日本人としては当たり前のことかもしれませんが、交通の便利さ、すごくきれいな空気・水などなど、その辺のSDGsも絡んで何か宣伝していくことは可能かなというふうに、ちょっとふと思いました。

○大田委員長

サイバーセキュリティについて、御説明をお願いします。

○館テクノロジーサービス局長

御指摘のとおりオリンピックは、実は普段ではあり得ないようなサーバーセキュリティのリスクが実は高まる時期でもございまして、特に今年は改元も初めとしまして、いろんな世界の注目が集まる年でもありますので、そういった意味では、関係者の中で非常に危機感が高まっております。

ただ、一方で一番安全な方針といいますか、やり方が新しいことはやらないにこしたことはない、確実に動くもので、確実に過去にも経験のある者だけを動かす。

ただ、やはり私もサーバーセキュリティにはNTTのほうでも何年かやってきたんですけども、やっぱり非常に思いますのが、守っているだけではバランス的にはよくないですね。ITというのは、あくまで活用とセキュリティのバランスというのが大事だと思いますので、守っているだけではサイバーセキュリティの技術もやはり進歩しないと思いますし、そういった意味では、大丈夫ですとはとても言える立場ではないんですけども、少なくとも今、スポンサー様、初め、若手のセキュリティの技術者が物すごくやりがいを持って取り組んでいることは事実だと思いますし。彼らの経験値というのが実はさっきも言いましたけども、いわゆるソフトレガシーとしては私から見まして、非常に価値が確実にあるだろうなというふうには思っています。

この分は、なかなか日本の技術が必ずしも世界トップレベルではないんですけども、そういった意味ではセキュリティのオペレーション、人の技術に関してはかなり世界的にも評価が高いところがありますので、そこは今回のオリンピックとして一番価値があるところかなというふうには感じています。

○大田委員長

石黒先生、何かサイバーセキュリティに関して補足していただくことはありますか。

○石黒委員

私の認識は、何かすごく控え目におっしゃった館さんの認識とは全然違って、今年の例えば皆さん、大田委員長にも要するにこれから日本がどういふものを残せるかとお話があったでしょう。そこで、ほかの企業とか事業体とか、いろんなところに影響を一番与えた企業はどこか。

それで、そういう企業が集積している国はどこかと。それで日本、あれは井伊副社長のほうがよく御存じだと思うけど、NTTは8年連続でトップで、日本の企業の要するに影響力を他に与えた企業の数でいったら日本は断トツで一番なんです。

つまり、日本の技術は、もちろんセキュリティの関係も含めて世界をリードしている。私はセキュリティの問題はいろいろやってきていまして、だからなおさら日本の技術なんか捨てたものじゃないし、日本のCSIRTの技術も、とにかく、レベルは高い。ロンドンやBTよりも高いと思います。

○井伊委員

ありがとうございます。井伊でございます。

実は、サイバーセキュリティというのは無限ループの話でして、やればやるほど相手が腕を上げていくということで、今、ここまでできていますということあまり発表すると、弱点を見せるような話になりますけれども、基本はブロックすることは実は難しく、入ったものを早く検知して、それで遮断するという技術なんですね。

ですから、いかに仕掛けが入ってきたことを早く察知できる仕組みをネットワークとかいろんなところに用意をしておいて、検知したことをすぐに判定してブロックをしてしまうというような、遮断してしまうという技術を磨いています。

そのために内閣府の情報セキュリティ推進室とか、企業とか、いろいろ連携したり、場合によっては外国側からも例えば同盟国側からも監視をしていただいたりして、見ていただいているということで、いろんな取組をしながら何か起きていますよということ早く察知するということにいかにスピード感をもってやるかというのが、今、技術の最先端です。

そういった意味で、人の技術も必要ですし、仕掛けをちゃんと入れておく技術も必要ですし、ただ、あんまり自慢すると、またそれをへこましに来るやつがいっぱいいますんで、あまりこういうことができていますということをなかなか言えない領域ではあるんですが、大変な私も危機感をもってこの問題は対処しております。

通信が普通のハッカーというと、何かパソコンとかスマホが乗っ取られるというのがありますけど、そうじゃなくて例えば原子力発電所ですとか、電源とか、いわゆる日本の非常に大事なファシリティをアタックされてしまうような、そっち側のほうのほうか、むしろ影響力が大きくてニュースバリューがあるものですから、そういうところをハッカーが狙ってきたりするので、我々は自分たちの例えばネットワークとか、パソコンだけ守っていてもしょうがなく、どうやってそういう一番重要施設のニュースになりそうなところを守れるかみたいなところを重点的に、今、取り組んでいます。

○石黒委員

一応、法学部なものですから、二ついいですか。手短にします。

今、お話で補足された点なんですけど、法学部的に言うと、通信の秘密の研究というのは日本は全然だめで、全然進んでいないんですよ。

それで、そうすると何が起きるかという、セキュリティを守るために何かやりたいだ等と憲法学者も含めて必ず言い出すやからが多い。

それで、でもオリンピックはあるわけで、セキュリティ上の非常に脅威であることは確かです。

では、どうするかと、私が現実と言っているかという、村井さんは絶対同意してくれると思いますが、この日本の中に全部ウオッチしている必要はないわけですよ。だから、アメリカからウオッチする、日本もオリンピックを守るためにね。アメリカとか、いろんなところからウオッチするというグローバルネットワークみたいなものは実際あるわけですけど、そのほうに問題が起きたら日本の中で通信の秘密を守って、オリンピックを守ったんだというふうな世界に持っていかんと、この日本の中の通信の秘密をめぐる議論のこう着状態から何十年も動いていないんですよ。それが1個。

もう一つは、これは御検討があるならばいいんですが、いろんなサービスが日本に来る人にスマホだけじゃなくてネットワークサービスするでしょう。その中には、いろんな個人情報みたいなものも入れておかないと、危ないからできないわけでしょう。

それで、日本の中で使った最先端のものを海外に持っていくときは、その技術でもって日本の中でしか使えないようにしておくでしょう。ところが、そういう技術があるならば、それを外す技術もあるわけですよ。外したらどうなるかという、特にアジア諸国、中国も含めて、データローカライゼーション規制とか、それから個人情報保護の規制もそうだし、ややこしいんですよ。

EUとの間で日本が手を打ったって、あれも信じられないんだけど、でも、それ以外にもいろんな点があって、この点については東洋大学の生貝准教授というまだ30代の若い方がやっていて、御検討が本当にキーワードはアジア諸国の個人情報保護及びデータローカライゼーション規制、データ伝送規制でもいいんですが、それに対する日本の中で使っていたスマホ等を持ち帰るわけですね。

そのときに、また日本でのサービスを受けられるとなると、いろんな国ごとにみんな見事に違うから向こうの規制にひっかかるんですよ。

そういうところ、それもイタチごっこなんだけど、ある程度、それに対する目配りしないと、知りませんでしたじゃ済まないんで、必要が起きたら生貝君にも意見を聞いたりなんかして、村井さんの御指導のもとに、つつがなく会が終わるようお願いいたします。

以上。

○大田委員長

今の二つ目の点、よろしくお願ひいたします。

ほか、いかがでしょうか。宮川さん。

○宮川委員

資料3を拝見してまして、このテーマ、それから課題、取組方向、コンセプトなど、もう大分昔に、2年ぐらい前ですかね、策定したものです。通常ですと、動きの速い、変化の激しい時代で、2年たつと陳腐化するという可能性もあるとは思ったんですが、今、こうやって読み返していても、まだ幸いなのか、不幸なのか、追いついてきていないと、まだまだ課題として十分に委員会が提示した方向性というものは生きているというふうに再認識いたしました。

いろいろな分野でいろいろなプロジェクトが進んでいることは、大変敬意を持って拝見しておりますけれども、特に今回いただいたロボットの分野では、なぜか海外の方から見ると、日本は鉄腕アトムで、もうとつと人間と語り合い、友達になり、空を飛んでいるようなロボットが生まれているはずの国だというふうな、何かそういう期待があるみたいですね。

マジンガーZもありますし、ああいうロボット大国だという期待は、私はかなりの部分がアニメとか、そういうものから来るイメージもあるのではないかと考えています。

それを海外の方の期待から見ると、どうも今、ロボットのプロジェクトとしていただいたものはすごく大事な部分ではありますが、ベーシックなもののように見受けられて、それが日本のロボットというもののイメージと合っているのかどうかと思いました。

もっと派手でもいいんじゃないかという気持ちはしております。それは、いろいろお考えのことだと思っておりますが、海外の方は違った見方を日本という意味では持っているのではないかという印象です。

それから、もう一つ、これはどういう形で御提示申し上げたらいいのかわからないんですが、資料7の機運醸成ということでチケットの事前登録キャンペーンを実施されているという情報をいただいておりますが、私のところに海外の知り合いからメールが何件も来まして、オリンピックのチケットを発売したんだってねという、これは全く間違った情報なんだと思いますが、どうやったら私たちはそのチケットを買えるのか、一応、ホームページを見たんだけど、何も情報がないのでわからないと。何かクレジットカードを入れなくちゃいけないような感じがするのだけれども、何かやれることはあるのかと、そういう問い合わせのメールが海外の知り合いから来ております。

サイトを拝見しますと、まだ登録、しかも国内の人向けということで、英語のものはまだ、私が見たときはなかったんで、多分、少し何かチケットの動きがあるぞという情報を得た外国の人がチケットを買うために何かやらなくちゃいけない

じゃないかといって、慌てた人が一部いるという印象でした。

ということですので、海外の方も非常に関心をお持ちだと思いますので、チケットに関する情報はできるだけ外国の方が読んでも今、何が起きているのかわかるような、そういう情報提供をしていただいたら混乱がないのかなというふうに感じました。

また、日本にいる方の事前登録だと思いますが、日本に住んでいる海外の方もいらっやっって、その方たちが登録できるのかわかりませんが、そういう意味では日本語だけですと、やや情報提供としては不十分ではないかなというふうに思いました。

もし、今、追加で多言語化をやっている最中でしたら、申し訳ありませんが、今、そういう問い合わせが来ているので、ぜひお考えいただけたらと思いました。

以上です。

○大田委員長

チケットの件は、海外対応はもう既にやっておられるのでしょうか。

○古宮副事務総長

今のチケットはあくまで国内向けで、海外はチケットの売り方・買い方が違います。

海外の方が買われる場合は、海外の実実はATRという専門業者が各国にあります。そこで売り出しになるので、ちょっとそういう意味では別扱いになってしまって、こちらサイドにもう少し書いておいたほうがいいかと思うんですけど、こちらで売るチケットをそのままという形ではないので、そういう仕組みになってしまっているというのがございます。

○大田委員長

それから、一つ目のロボットなんですけど、確かに日本人はロボットへの感じ方に独特のものがあって、例えば、ロボット掃除機に対して、かわいいという感じ方をするんですよ。掃除の途中で止まってしまったら、それがまたかわいいというところがあって、独特の接し方があるんですね。

ですから、資料に書かれている「人々に寄り添う」とか、「社会実装」という面も日本の一つの重要なロボットとの接し方だと思いますが、楽しかったり、かわいかったりというのもあるんじゃないでしょうか。アイボなどもありますよね。そういう面もロボットプロジェクトでお考えいただければと思います。

○平田イノベーション推進室長

ありがとうございます。

そのような議論が、当然、ロボットをやるときに、例えばテレビで皆様、御覧になったと思うんですけど、アメリカでバク宙をすとか、バク転をするようなロボットがあったり、ドアを自分であけて歩いていくようなロボットがあったりと、非常に高度化されたロボットがもう発表されております。

ただ、実際、裏を返しますと、そういうロボットはみんな軍事産業がつくっているところがございます。今回、たしか日本でもそういうことを考えている人はいると思うんですけど、先生方がお集まりになって議論をされた中に、アメリカを超えるようなロボットを今からつくるのは無理だよというのが、かなり厳しい意見としてあります。もう1個の事情は、日本のロボット産業そのものが、なかなかビジネスになっていないという現状もございます。

したがって、各企業の皆様がロボットに関する投資予算も少し抑制ぎみということもございまして、もちろん今、御指摘いただいたことを諦めているつもりはございません。やはり、みんな、あっと驚くようなものだから、それから、かわいいねというふうに言っていたのも、これから求めていきますけれども、ただ、なかなか実際、業界の方々とお話をさせていただきまして、非常に厳しい壁がどうもあるようで、何とかそこを越えるように、もう少し時間はございまして、やっていきたいと思っておりますけれども、貴重な御意見、ありがとうございました。

○大田委員長

パナソニックの薬を運ぶロボットのホスピくん、あれもかわいいんじゃないですか。

○宮部委員

例えば、顔をつけたりしてね。うれしそうな顔をしたり、悲しい顔をしたり、そういう愛きょうでちょっとごまかすこともあると思うのですが、でも人間の動きと同じことをするのは、非常に難しいことなんですけれども、それができると驚くんですよ。驚くけども、ビジネスにならない、人間がやったらいいので。

日本は、例えば、自動改札ロボットがある。皆さん、通っておられる改札口には人がいなくなりましたよね、あれ、ロボットですよ。あれは、電子部品実装機もロボットなんですけれども、それらは人の形をしていないですよ。

だから、機械として実現するときに、どれが最も合理的でとなると、だんだん人の形から外れてくるということ。

だから、驚かせるテクノロジーなのか、本当に役に立つテクノロジーなのかということが、掛け算ができるところはなかなか少ないのが悩ましいところですね。

○大田委員長

自動改札で「いってらっしゃい」とか、「おはようございます」と言ってもらう必要はないですね。

○宮部委員

そうですね。自動改札で多少、声をかけてくれたらいいですよ。「ちょっと二日酔いですか。」とかね。そう言ってくれたらよいのかもしれないね。

○大田委員長

他方で、「変なホテル」のような例もあることだし、何かああいうおもしろいのがあってもいいんじゃないかな。翁さん、お願いします。

○翁委員

御説明ありがとうございました。

いろいろな案の取組が進んでいることがよくわかったんですが、資料3で取組の方向性と出ているものは、今、方向としては今日、御説明がなかったところにつきましても、ほぼそういう方向で実現できるということになっているというふうに考えていいんでしょうかということ、ちょっとお伺いしたいと思います。

例えば、顔認証による運営効率化とか、入退場システムとか、そういったところは本格的に実現できるのかとか、あと、海外からいらした方が、本当に何かSuica的なものを買って、交通のプラットフォームでは全てキャッシュレスでできるのかとか、そういったところがちょっと気になっているんですが、その辺り、教えてください。

○伊藤企画財務局長

今、御質問いただいた点で、まず顔認証システムによる入退場のシステムでございますが、これは今、導入をするということで、ずっと進めてございます。ただし、顔認証でございますので、事前に顔の登録が必要になってまいりますので、全てのいわゆる一般のお客様全員を対象ということではなくて、私どものほうでアクレディテーションカードという大会関係者ですね。これは、ボランティア等で働く者も含めて、もしくはIOC等で事前に登録をされている方々、こうした者でも相当な人数に及ぶんですけども、その方々については、事前登録もしてございますので、顔認証でぴっとすぐ入れるような形ということで、これはオリンピック・パラリンピック大会史上初めての導入ということで、かなりスムーズに入退場も、またスムーズかつ確実に入っていただけるような形になるのではないかとこのように思っております。

大会へのキャッシュレス化の部分でございます。いわゆるオリンピック・パラリンピックについては、VISAさんが大会パートナーになっておりまして、中では現金以外で物を買う場合には、VISAカードさん、このシステムを使うということが一種の約束事になっているものでございますので、今、さまざまな電子マネーが広がってはいるんですけども、これをそのまま導入するというわけにはいかないんですが、各会場では現金に加えてVISAさんのシステムは活用できるようにはしていきたいというのが、まず大会の中の枠組みでございます。

そのほか、例えば交通系、まちの中でどこまで広げるかという部分については、実は今、私どものパートナーさんでもございますが、JRさんを初め、公共交通機関のほうでも、どういうふうになればよりサービスとして海外から来た方々にも、今、通常、デポジットをとっている登録をしてという形なんですけど、ここを円滑にできるようにというのは、実は各社さんのほうでいろいろ御検討もいただいている部分でございます。

私どものほうで決められる部分ではないわけでございますけれども、そうしたところも連携をして、できるだけ多くのインバウンドで入ってきた方々に便利さを体感していただけるような工夫というのをオールジャパンでできればなというふうに思っております。

○大田委員長

資料3の「取組の方向性」は、特別御紹介がなかったものについても進んでいるということですよ。

○伊藤企画財務局長

はい。概ねこの方向で進めてございます。どこまで入れられるかということについては、なかなか検討の中で十分にできる部分と、100%達成というのは難しい部分もあるんですが、方向性はまさにこの方向で着実に進めているところでございます。

○大田委員長

よろしくお願ひします。
秋池さん、お願ひします。

○秋池委員

二つあるのですけれども、一つは、先ほど御紹介いただきましたスマホのアプリケーションに対するアクセスが過去の大会の中で最も多くなるというようなお話がありました。交通についてはTDMということで、要するに過剰な負荷を平準化するような取組をしておられるということですが、それでも通常よりは負荷はかかるんだと思うのですけれども、同様に通信ですとか、その他の領域でも経験のないような負荷が瞬間的にかかるということがきつとあるのだと思いますが、そういったものに対する対応というのは十分なのかどうかいかがでしょうか。恐らくやっておられると思うのですけれども、教えていただければと思います。

あと、もう一つは、いろいろなシステム、ITも含めてアプリケーションも100ぐらい開発しているということ。アプリケーションはきつと何かOS的なものの上で動くので、アプリケーション同士のつながりはあまり関係ないのかもしれませんが、ITのシステムもいろいろあるし、それから物理的につくっているいろいろな仕組みとか取組もある。そのはざまの部分がつながりができるのかどうかということは、当然ながらどなたか見ておられると思うのですが、やはり気をつけなければいけない。

といいますのは、そういったつながりの良さのところは質の高さが見えてくるということだと思いますし、そういうところで何事もなく終わるといふことそのものがジャパンブランドであると思いますので、そういった辺り、最後の磨き上げの部分なのかもしれないのですけれども、準備段階からやっておかないといけないこともあると思いますので、取り組んでいただきたいと思います。

それから、先ほど委員長のほうからもありました、ジャパンブランドの復権に近づいていくのかということなのですが、今申し上げたような、シームレスとか、破綻がないとか、手ざわり感がいいとか、つながりが極めてスムーズであるというようなことも、まさにジャパンブランドだと思いますけれども、ロボットということでは、今日のお話で幾つかありましたように、人間と機械の境目がないようなところというのは、日本の一つの特徴なのかなと思います。

そういったことを世界に対して訴える方法と、それから国民に対して訴える、国民がそのAIで日本を再発見したり、励まされたりするということも、先ほどの被災地の話もありましたが、大事なんだと思っております。人と機械の境目というのは一例ですけれども、全体としてジャパンブランドというものをどういうふう国内と海外に訴えるのか、そこはよく考えて工夫したほうがよいのではないかなと思ひました。

といいますのは、先ほど委員長もおっしゃいましたけれども、いろいろ動いている割には、それほどまだ国民にも手ざわり感が出てきていないというようなところもございますので、そろそろそういうことをする時期に来ているのかと考えております。

○大田委員長

今のご意見の特に前半のほう、何かございますでしょうか。

○館テクノロジーサービス局長

ありがとうございます。

まず、最初の通信環境の点でございます、まさに御指摘のとおり、特に地方の競技場なんかもそうなんですけれども、普段あり得ないようなトラフィックが一時的に発生するということが、競技場のいわゆるWi-Fi環境ですね。競技場だけではなく、ラストマイル、それから最寄りの駅辺りのいわゆるWi-Fi環境が非常に今、課題になっております。

それで、今、東京都様のほうとも少し調整させていただいておりますが、一部の競技会場は、かなり客席もWi-Fiでカバーされる計画がございなんですけれども、やはり多くの競技会場はなかなか仮にそれを整備したとしても、大会が終わった後に、じゃあ、どこまで活用されるのかという問題がございします。

それで、やはり競技場によっては、少しめり張りをつけた、そういった通信環境の位置づけの整備が必要だろうと、客席をカバーするというのは実はわかりやすいんですけども、物すごく投資の規模としては桁違いに、いわゆる高密度のWi-Fiという言い方をするんですけども、投資が必要になります。

一方で、例えば入り口の人が滞留するところ、あるいはコンコース、それから売店とか、チケット売り場の周辺だけをピンポイントで快適につながるように環境整備するということが、比較的限られた予算でもやりやすいということで、問題は中途半端に客席にWi-Fiがつながるといふ期待感でお客様が来られてしまいますと、多少つながってもゲームが始まったら全然つながらなくなったということが、実際に過去大会でも、平昌でもあったんですけども、やはりWi-Fiが使えるスポットなり場所をあらかじめわかりやすくアナウンスすることもあわせてやっていくことによって、いわゆる観客の方から見た快適さをなるべく損なわないという作戦が必要かなと思っております。

それから、二つ目のアプリケーションIT、物理的な動きとの、それ、実はまさにオリンピックで一番難しいいろんな大量のロジスティックですとか、人の誘導をガイダンスするという、まさにモバイル技術が最も活用、ニーズが高いところではあるんですけども、やはり一発勝負の大会でございしますので、ここをテストイベントとも含めて、かなり人間のオペレーションの習熟度をどこまで上げられるかというのは、実は最後のポイントになってきますので、おっしゃるとおり、単なる機

能レベルであれば、今、世界的には別に誰がつくっても同じようなOSに同じようなチップを使ってやるだけなんですけども、やはりそれをいかに最高にこなせるか、いかに日本人らしいきめ細かい計画をちゃんと準備して実現できるかというところが、一番の勝負だと思っていますので、今日のコメントも十分腹に落とし、頑張っていきたいと思います。ありがとうございます。

○大田委員長

よろしくお願ひします。

榎田さんは、ホスタウンを増やすのに、大変御尽力いただいているんですが、もっと増やすのに何かお考えのことがあれば。

○榎田委員

僕も今、なぜかホスタウンの営業を何かすることになっていて、日本中行きまして、そこでホスタウンはどうですかという話になるんですけど、今日、実はちょっと午前中に内閣官房さんのほうに行きまして、その話をしてきたんですけど、やっぱりホスタウンというのは、意義ばかり何かプッシュされていて、情報として、それでメリットといいますか、具体的に例えばビヨンドもそうですけど、企業が関わるといったときに、メリットみたいなものが全然情報化されていないなど。

それが行政に対してのメリットもそうですし、企業に対してのメリットもそうだし、あとは教育に対してのメリットみたいなものが意義じゃなくて、やればこんないいことがありますよということを出していかなきゃいけないと思うし、今、ホスタウンで頑張っているところで、理想のところまで行き切れていないんですけども、そこをちゃんと取材とかして、今、迷っている人たちに、こういうふう頑張ればこうなるんじゃないですかと、ここはそんなに負担はないですよと、むしろこういうメリットもあるんじゃないかということやちゃんと伝えないとやっぱり、役人の人が、僕が行くと思うと何か逃げちゃうとか、そんな余裕がありませんみたいな感じで、みんな逃げられちゃうんで、何かメリットを提示するということは、ちゃんと情報化しなきゃいけないかなというふうに思います。

○大田委員長

伊吹さん、何かコメントがありますでしょうか。

○内閣官房伊吹参事官

今、相手国が、オリンピックに参加する国は200を超えようと思うんですけど、ホスタウンがある国は実は120ぐらいしか今はまだなくて、ポイントが二つあります。

一つは、地域的やっぱりなじみが薄いところは、なかなかなくて、やっぱりアフリカ、中東、それからカリブ海とか、あの辺が少ないんですね。そのため、これは外務省の力もかりて営業を僕らもしているんで、今年、特にTICADもありますんで、しっかりやっていきたいというのが一つ。

それから、二つ目は、榎田さんがおっしゃったことと関係するんですけど、特にパラリンピックのパートナーになってくれる自治体さんが非常に少ないので、これはさっきのメリットと逆の話で、パラリンピックだと受け入れにもすごいコストがかかるんじゃないかと。設備がいろいろあるんじゃないか、食事を特殊なものをすごく用意しなきゃいけないんじゃないかというふうに、自治体さんが考えてしまうので、これぐらいのことでできるんですよと、比較的規模の小さい自治体でも、こんなことでちゃんとやっていますよということをやったり内閣官房がしっかり情報共有して、促していくということをやっているのかなということや二つぐらい考えているということでもあります。

東京大会は来年なので、今年が勝負と思っており、しっかり営業したいと思います。

○大田委員長

情報提供とあわせて、何かメリットを工夫してアピールしていただければと思います。

先ほど、高田委員からご発言がありましたが、G20やラグビーワールドカップの場を通して、それから今お話のあったTICADの場を生かして、何か取り組みをやっていく。あるいは、ワールドカップとタッグを組んでやっていただくことが必要だと思いますが、スケジュール表には明示的には書かれていません。何か取組をしておられますでしょうか。

○伊藤企画財務局長

実は、ラグビーワールドカップの組織委員会とは、私ども連携協定を締結させていただいています。

もう一つ、あまりまだ十分に知られていないです。2021年には関西でワールドマスターズという、やっぱりスポーツのイベントがございまして、19、20、21と3年続けて世界的な大会が日本で行われるということで、この三つが連携しながら一緒にPRをしていこうではないかということで、取り組んでございます。

通常、それぞれのマスコットは、それぞれの場面でしか出ないということで、相並ばないというのが今までだったんですけども、少しその辺りについては柔軟に一緒にマスコットもPR活動をできるように、相互に情報発信に努めていき

たいというふうに思っていますので、非常にいい機会だと思っています。

G20のほうは、政府のほうでしっかり仕切っていただきますので、その部分とは直接的なイベントだけPRはないわけですが、やはりG20等で世界から来ていただいた方に、各国首脳の方に2020も日本にぜひ来てもらいたいということをアピールする場にもなるというふうに思っていますので、その点については、政府外務省ともまた連携を図っていききたいと思います。

○大田委員長

ラグビーワールドカップは、このレガシーコンセプトの中の「地方の魅力全開」にも関わりますので、よろしく願います。

あと、今日、お話にはなかったんですが、訪日する方への災害情報の提供も検討が必要です。NHKの国際放送を日本のホテルで入れているところもありますけれども、まだ多くはありません。地震だけでなく、夏ですからゲリラ豪雨の可能性もあります。海外の方が、刻々と変わる災害情報をどうやって手に入れていくのかという辺りも、御検討いただければと思います。NHK国際放送は、ラジオだと18カ国とか19カ国語でやっているようですし、スマホアプリのダウンロードもできるようです。インバウンドの方への災害情報の提供はいまでも課題ですが、ぜひオリパラを機に充実できるように御検討いただければと思います。

ほか、何かございませんでしょうか。

○館テクノロジーサービス局長

実は、今の御指摘、モバイルアプリケーションのほうでも検討しております。

それから、先ほどキャシー松井様のコメントにもありました、公共交通機関の話も、実は日本のいわゆるナビゲーションアプリケーションで、初めての方でも非常にスムーズに乗れたというお声をIOCですとか、関係者からいただいていますので、それも関係者向けに使いやすく提供できるように今、準備してございます。

○大田委員長

ほか、いかがでしょうか。キャシーさん。

○キャシー・松井委員

すみません、聞くのを忘れましたけど、榎田さん宛てに、ホストタウンの子どもたちを例えばオリンピックが始まる前に、一回、東京とかどこでもいいんですけども、集めてネットワーク、いわゆる子ども同士のネットワークづくりで、その後、オリンピック後も何かずっとそういう学校、学長、先生、子どもたちがそういうずっと続けられる全国ネットワークづくりはお考えでしょうか。

○榎田委員

今、ホストタウンサミットが少しその役割をしているんですけども、それともネットでつながるといようなこともやっぱりやっていったほうがいいんじゃないかなと思うんですね。

やっぱり、子どもたちを東京に集めるのって、実は結構、学校とか負担で、特にたくさん来れば来るほど、負担が増えるので、もちろんやりたい。実際に顔を合わせるというのは大事なんですけど、それ以外はとにかくネットでそういった情報交換とか、そういった普段のやりとりをできるような状態ができないかなというふうなのを今、考えています。

○大田委員長

才藤さん、お願いします。

○才藤委員

前回、出られなかったんですけども、日本らしいという意味では、やっぱりバグを潰すことはもうちょっと考えたほうがいいんじゃないかなと思うんです。

要するに、先のことばかり言っていますけど、今のまちの中で、たくさんあると思うんですね。例えば、東京駅の八重洲口のタクシーのところとか。タクシーは大分変わりましたよね、乗りやすくなっているし、バックで入る。けども、JRの全ての駅、新幹線のタクシー乗り場は最悪ですよ。そのため、もう1かいそういうバグを洗い出したらいいのかなと。

これは、多分、JRとタクシー会社と全然コミュニケーションをしていない。八重洲口は、本当に僕、今日もここに来たときは、あそこには並ばずに反対側へ行って、タクシーに乗るわけですね。

そういう日本で、これはひどいよねというのをもう一回、洗い出したほうがいいんじゃないかなと。先を考えるのも重要ですけど、障害者も含めて、それはやったらどうですかね、と思います。

○大田委員長

これについては、松縄課長もよろしくお願ひいたします。まず、東京での問題の洗い出しと、それから全体的にも必要かと思ひます。よろしくお願ひします。

ほか、いかがですか。井伊さん。

○井伊委員

今の関連なんですけど、ちょうど私、国土交通省さんと今のようなお話で、インバウンドの方々のお困り事という中で、まず、コインロッカーはどこがあいているかというのがわからないとか、それから、どこからバスに乗ればいいのかというのがわからないとか、あるいはレンタカーを借りている人なんか、どこに駐車場があるのかわからないとか、実は情報発信が足りなくて、戸惑ってしまうというのを何とかサポートできないかということは、今、要請されていて、オリンピックに限らないんですけども、混雑状況なんかは実はわからないとか、何も混んでいるところにわざわざ今、行かなくてもいいわけですよ。

お寺なんか行列をなしているところに行かないで、もっとすいているところを先に回りたくとか、ちょっとそういうことに関して、おもてなし的なことをもっとICTとか使ってできないかというんです。しかしながら、そのためには様々な情報がオープンにされてないと難しいということが分かりました。どこのロッカーがあいているかという情報とか、そういうのを出していただかないとできないみたいなものがあって、外づけだけではできなくて、やっぱり関係者のいろんな合意がないとできないというのが実態だと思っています。

○大田委員長

もうそろそろこういうきめの細かいところに対応していく時期だと思いますので、組織委員会と東京都でどうぞよろしくお願ひいたします。

ほか、よろしいでしょうか。

(なし)

○大田委員長

大変貴重な御意見をたくさん、ありがとうございました。

事務局はますますお忙しい時期に入りますが、今の御意見を受け止めて、対応策を御検討いただければと思います。

それでは、最後に今後のスケジュールと事務連絡について、事務局より説明お願ひいたします。

○石川アクション&レガシー部長

本日は、お忙しい中、誠にありがとうございました。また、多方面からの貴重な御意見をいただきまして、本当にありがとうございます。非常にいろんな要件がある中で、どういう形でできるかということは、当然、検討するとともに、また、このアクション&レガシープランのまとめについても、今言った動きも踏まえて、次回以降、具体的な内容を御提示させていただきたいというふうに考えておりますので、引き続きよろしくお願ひいたします。

また、本日の議事の内容については、従前どおり、基本は公開をさせていただくということで考えております。事前にお送りさせていただいて、確認の後、公表したいというふうに思ひます。

また、冒頭、伊藤CFOのほうから御説明させていただきましたとおり、次回の開催についても、実際のところ今年の夏からテストイベントが始まることもあります。実際に、テクノロジーも大会実装的なものが具体的に現れてきますので、そういった内容も精査・整理をしまして、来年のまた同じぐらいのタイミングに開かせていただきたいというふうに考えておりますので、よろしくお願ひいたします。

私からは以上でございます。

本日は誠にありがとうございました。